

手術

小酒井不木

青空文庫

×月×日、私の宅で、「探偵趣味の会」の例会を開きました。

随分暑い晩でしたが、でも、集ったのは男の人が五人、女の人が三人、私を加えて都合九人、薄暗い電燈の光の下で、もと鯨の血のよなまずうな色をした西瓜をかじり乍ながら、はじめは、犯罪や幽霊に関するとりとめもない話を致しました。

「……それにしても九人というのは面白いですねえ。西洋の伝説にある妖婆は、九という数すうを非常に好むという話ですから」と、社員で西洋文学通のN氏は言い出しました。いつの間にか私たちは怪談気分にはひたって居たこととて、妖婆という言葉が、いつもより物凄く私の胸に響きました。

N氏は続けました。「シエクスピアのマクベス劇で、三人の妖婆が魔薬を煮るところは可なり恐しい思いをさせられます。その魔薬の成分の一つとして、子豚こぶたを九疋食ひきった牝豚の血が、鍋の中へ入れられますが、あの無邪気に見える豚でも、共食いするかと思うと、何となく気味の悪いものですねえ……」

こういつてN氏は、私たち九人あたかが、恰も九疋ひきの子豚こぶたで、今にも牝豚ならぬ妖婆が、私たちを食べにでも来そうな雰囲気を作り出しました。

この時、弁護士のS氏は言いました。「どうです、いま、共食いの話が出た序ついでに、今晚は、人間の共食いを話題としようではありませんか」

「いい題目だいもくです。皆さんどうですか？」と私が申しました。

「大賛成！」 「結構ですわ！」と皆々同意されましたので、私は申しました。

「先ずかい隗かいより始めよということがありますから、最初にSさんに御願ごんい致いたしましょう」

S氏は頭を搔かいて、「どうも、とんだことを言い出しましたねえ」といい乍ながら、でも、すなおに話し始めました。法律家であるだけに、穂積博士の「隠居論」に載って居る食人の例をよく記憶して居られて、老人隠居の風習の起りは「食人俗」にあることまで、極めて秩序的に説明してくれました。

それから、私が話す番になったので、私は変態性慾と食人との

関係について色々の例を述べて説明しました。恋人を殺してその心臓を切り出し、それを粉碎して、パンの中に焼き込んで食べた男の話などは、いつもならば何ともありませんが、今夜に限って、自分ながら妙な気持になり、外から盗人のようにはいつて来るなまぬるい風さえ、ちなまぐさ血ち腥ない臭いを持って居るかのようにな、思われしました。

次に大衆文芸作家K氏の日本文学にあらわれた食人の話があり、それについて、男の方も女の方もそれぞれ、凄い、面白い話をされ、最後にC子さんの番になりました。C子さんは数年前まで看護婦をして居られたのですが、故あつて今はタイピストをして居られます。

「それでは、今度はC子さんに御願ひ致しましょう」と私が申しますと、C子さんは、何故か先刻さつきから二三度太息ためいきをついて居られました。この時、決心したように言いました。

「思い切つて御話することに致しましょう。実は私が看護婦をやめましたのも、ある御方の食人が動機となつたので御座います。でも、この御話は、普通の女の方の前では、何だか、申しにくいところがありますから……」

「いえ、かまいません。どうぞ是非話して頂戴ちようだい」と他の二人の女の方が口を揃えて、熱心に申しましたので、C子さんは、「それでは」といつてしずかに話しはじめました。

その時、ふと私が明け放した座敷から、おもてを見ますと、蝸さ

座そりぎの星が常よりも鋭く輝いて、はや、西南の空の地平線に近いところへ移つて居ました。

△△医科大学が、まだ△△医学専門学校と申しました時分のことで御座います、私は、産婦人科教室の看護婦を勤めて居りましたが、患者の受持ではなく、手術場を受け持つて、手術の際に、ガーゼを渡したり手術道具を渡したりする役を致して居りました。主任教授はT先生と申しまして、その頃は四十前後の、まだ独身で御座いましたが、産婦人科の手術にかけては日本でも有数の御方で、その上弁舌に巧みでいらつしやいましたから、学校内は

勿論世間でも大へん評判が宜よろしゆう御座いました。いくら名医と申しましても、やはり人間である以上誤診ということは免れ得ませんが、T先生は平素、念には念を入れる性質たちでしたから、滅多めったに誤診はなく、たまたまあつても、患者の生命に少しの影響をも及ぼしませんでした。

ところがそのT先生が、どうしたことか、まあ、いわば、悪魔にでも憑つかれなされたのでしよう、たった一度だけ、世にも恐ろしい誤診をなさったので御座います。それがため、先生は遂にその身を亡ぼしてしまわれ、私も看護婦という職業を捨てたので御座います。

それはある夏のことでした。毎年、夏期には、教室で、産婦人

科学の講習会が開かれますが、その年も凡^{およ}そ二十五六人の聴講生が御座いました。聴講生と言いつても、みな、市内や近在に開業して居られる方ばかりで、どなたも相当な経験を積んで見えますから、T先生も殊^{ことさら}更に注意をせられて、手術の時など、私たちの準備を嚴重に監督なさいました。

ある日、T先生は、子宮纖維腫^{しきゆうせんいしゆ}の患者に、子宮剔^{てきしゆつ}出手術を施して講習生に示されることになりました。その患者は二十五歳の未婚の婦人でしたが三ヶ月ほど前から月のものがとまり、段々衰弱して来たので、先生の診察を受けたところ、子宮の内壁に纖維腫が出来て居るから、子宮を全部剔出しなければならぬとの事で、患者も覚悟をきめて、その大手術を受けることになりま

した。

御承知でも御座いまいしょうが、子宮を剔出するには腹部から致しますのと、局部から致しますのと二通りの方法が御座います。T先生は、講習生に示す関係上、後の方法を御選びになりましたので私どもはその準備を致しました。手術室は、中央に手術台が置かれ、その手術台のまわりに凡そ一間半ほど隔てて、生徒たちの見学する台が、手術を見易く^{やす}するため、ちょうど、昔のローマの劇場のように、一段々後ろへ高くなって備えつけられています。で、二十数人の講習生は其処^{そこ}へ半円形に陣取って、先生の臨床講義の始まるのを待つて居りました。

最初に先生は、当の患者を連れて来て、一通りその病歴を御話

しになり、子宮纖維腫と診断なさった理由を、いつもの通りの、
歯切れのよい、流暢りゆうちやうな言葉で御述べになりました。凡そ半時
間ほど説明をなさつて、患者を別室に退かせになりました。即ち、
その別室で、患者に麻酔剤を与え、患者が十分麻酔した頃に、手
術室に運んで、手術を受けさせるといふ順序で御座います。

やがて患者は手術室に運ばれて来ました。患者が手術台に乗り
ますと、私は大へん忙せわしくなるので御座います。先生も助手の
方々も、白いキャップを御かぶりになり、口にも白いマスクをか
けて手術に取りかかれるのが例で御座います。先ず、助手の方
々によつて、手術局部の嚴重な消毒が行われますと、愈々いよいよ先生
は手術に取りかかるために、特別な手術道具で、子宮を出来るだ

け手前へ引き出しになりました、順序として、指で丁寧に患部を触れて御覧になりました。

もとより、その間も先生は、聴講生に向って、熱心に説明して居られました。私にはよくわかりませんが、子宮纖維腫の出来たときには、子宮は林檎りんごのようにかたくなるのが特徴であるということを繰返し説明なさったようでした。

ところが、暫くしばらく触診をなさっておいでになりますと、先生の御言葉が段々乱れてまいりまして遂には、ぱたりと口を噤つぶんでしまわれました。そして、ちようど顕微鏡を御のぞきになるように、眼を近づけて、さらけ出されたものを、触診しながら、見つめて居られました。と、見る見るうちに先生の御顔に疑惑の色がただ

よい、その額にはオリーヴ油のような汗の玉が、ぎっしり並び始めました。恐らく先生はその時、夏の晩方、石だと思つて掴んだのが、墓であつたときのような感覚をされたことだろうと思ひます。と申しますのは、患者の子宮は先生の予期に反して、先生が指で御つまみになると、空氣の抜けかけたゴム鞣まりのようにくぼみましたからです。講習生の人々は、何事が起きたのかと、ちやうど、軍鶏しやもが自分の卵ほどの蝸かたつむり牛を投げ与えられた時のように、首をのぼし傾かしげて、息を凝らして見つめました。

御承知の通り、手術室には、塵埃ほこりは至つて少ないのですが、その時には、一つ一つの塵埃ほこりが、石床いしゆかの上に落ちる音が聞えるかと思われるほど、静かになりました。やがて先生の手は少しく顫ふる

えかけました。すると、先生は何事かを決心されたかのように、でも、何事も仰おつしやらずに、つと、子宮の中へ指を入れて、血のついた白みがかつた塊かたまりをつかみ出されました。が、それは、ほんの一瞬間のことで、先生はその塊かたまりを右の掌ての中へしつかり握りこんでしまわれました。講習生の方々は勿論、恐らく助手の方々も、それが何であつたかは御承知なく、やはり、子宮の中に出来た病的の腫物だと思つて居られたらしいのです。

けれど、けれど。

私は、不幸にも、その何物であるかを見てしまったのです。それは或あるいは私の錯覚であつたかも知れませんが、いえ、錯覚であらせたいと今でも思つて居ります。然しかし、兎とに角かく、その時、私の眼に

映じましたのは、小さい乍ながらも人間の形を具えた三ヶ月ほどの胎児でありました。私はぞつと致しました。急にあたりがまっ暗くらになって、今にもたおれるかと思いましたが、その時、先生が、この世ならぬ声で、主席助手の方に向つて言われた御言葉ではつと我にかえりました。

「もう、手術はすんだ。後始末をしてくれたまえ」

こういわれたかと思うと、先生は血まみれの手に、その疑問の組織をかたく握つたまま、私たちを残して、さつさと出て行つてしまわれました。子宮剔出の手術は？　？　？　講習生の方々は、催眠術にでもかけられたようにぼんやりした顔をして見えました。暫しばらくすると、患者の子宮から、はげしい出血がありました。

主席助手の方は、極めて落ついた性質でしたから、応急の手当を施されましたが、どうしても血が止まりませんので、私に、T先生を呼んでこいと仰おつしゃいました。私は、先刻からの心の打撃に、ふらふらして居た矢先ですからまるで夢中になって先生の御室にかけつけましたが、T先生は御いでになりません。で、産婦人科教室に属するすべての室を、一つ残らず捜して行き、最後に、建物のつき当りにある図書室に行きますと、T先生は手に血のついたまま、机によりかかって、ある書物を見つめておいでになりましたが、私のあしおと躓音をきくなり、その頭をむっくり上げて、私の方を向いてニツと御笑いになりました。

ああ、その時のT先生の御顔！

先生の口許にはべったり血がついて居りましたが、そればかりでなく先生の齒齦はぐきと齒まっかとは真紅まっかに染まって、ちようど絵にかかれた鬼の口をまのあたりに見るよう：で御座いました。はつと思うと気が遠くなって、私は図書室の入口にたおれてしまったのです：

ここでC子さんは、暫らく話を中絶させました。私たちは固唾かたづつを呑んで、その続きを待ち構えました。

「私の御話というのはこれだけで御座います。その患者はその夜、衰弱のため死亡致しました。先生はそれから長い間精神科の病室にはいつて居られましたが、先年インフルエンザはやの流行はやった時、肺炎にかかって寂しく死んで行かれました。

で、最後に残る問題は、T先生が患者の腹から胎児を御取り出しになったことも、T先生の口の中が真紅まっかであったことも、果して私の錯覚であったかどうかということです。然しかしたとい先生の御取り出しになったのが、胎児でなかったとしても、T先生が誤診なされたことは事実でありますしなお又、先生が、その疑問の組織のやり場に困って、最も安全な隠し場所として、御自分の胃袋を御選びになったことも、やはりたしかであると思つて居るので御座います。

このことがありましてから、私は看護婦という職業に厭いや気がさして、現在の職業に移つたので御座います……」

（『新青年』一九二五年十月）

青空文庫情報

底本：「現代怪奇小説集 中島河太郎・紀田順一郎編」立風書房
1988（昭和63）年7月10日第1刷発行

初出：「新青年」

1925（大正14）年10月号

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：藤真新一

校正：柳沢成雄

2002年10月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

手術

小酒井不木

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>